



A decorative border with a repeating floral and vine motif surrounds the entire page. The border is composed of stylized leaves and flowers connected by flowing lines.

日本古典集成

源氏物語  
二

石田穰二 清水好子 校注

新潮社版

新潮日本古典集成（第二三回）  
源氏物語二



定価一五〇〇円

昭和五十二年七月五日 印刷  
昭和五十二年七月十日 発行

校注者

石田穰二  
清水好子

発行者

佐藤亮一

印刷所

大日本印刷株式会社

発行所

株式会社 新潮社

〒一六二 東京都新宿区矢来町七一  
電話 東京 03(二六六)五一二(業務)  
東京 03(二六六)五四一一(編集)  
振替 東京 四一八〇八

装画 佐多芳郎  
組版 シーティエス大日本  
製本 新宿加藤製本

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

凡例.....三

紅葉賀.....九

花宴.....四七

葵.....三

賢木.....一三五

花散里.....一九一

須磨.....一九九

明石.....二五七

付 録

催馬楽ほか

琵琶引

系 図

図 録

.....三三

.....三六

.....三三

.....三六

## 凡 例

一、本巻には、紅葉賀、花宴、葵、賢木、花散里、須磨、明石の七巻を収める。

一、本文は、青表紙本系統中の善本とされる、平安博物館所蔵の、大島雅太郎氏旧蔵本、通称大島本を底本とするが、青表紙原本の存する巻と、青表紙原本の忠実な臨写本である明融本の存する巻とは、これらを底本とする。

一、本巻では、花宴は明融本、花散里は青表紙原本（定家自筆、前田家尊経閣蔵）を底本とし、紅葉賀以下の五巻は大島本を底本とする。

一、底本の本文を改めなくてはならないと考えた箇所については、他の青表紙諸本、場合によっては河内本、別本の本文によって校訂して本文を立てたが、それは最小限度必要と考えられる範囲に限った。

一、以上、底本の選択、ならびに底本の校訂に関する本書の方針については、第一巻巻末解説中の「テキストについて」「校訂について」を参照されたい。

一、本文を読みやすい形で提供するために、ある程度の統一のもとに、仮名に適宜漢字を宛て、仮名づかいは歴史的仮名づかいに改めた。漢字は現行の字体を用いた。また句読点、濁点をほどこし、そのほか、会話には「」をほどこした。

一、語の清濁についてなお問題は多いが、ほぼ『湖月抄』の清濁によった。結果として、現在通行の濁音を清音に改めた場合が多い。「かへりごと」「からうじて」「しかじか」「まらうど」を、それぞれ「かへりこと」「からうして」「しかしか」「まらうと」とするたぐいである。

一、底本の漢字表記のうち、数詞の「五六日」「三四人」などは、「ゴロクニチ」「サンシニン」などのように音読すべきものと考えられるので、振り仮名を付けなかった。

また、月名には、たとえば「やよひ」「三月」両様の表記がある。「三月」の方は音読すべきではないかと考えられるので、こうした漢字表記も、底本の表記を尊重して、振り仮名を付けなかった。

一、「大殿」「大との」については、底本の大島本には、漢字表記のほか、「おほいとの」「おほとの」両様の仮名表記が見られる。「おほとの」という読み方は漢字表記の「大殿」「大との」から派生したものではないかと考えられるので、すべて「おほいとの」に統一して、本文は「大殿<sup>おほいとの</sup>」で立てた。

一、注は、傍注（色刷り）ならびに頭注による。現代語訳、人物の指示は傍注で、説明（系図を含む）は頭注で、という原則であるが、説明を付け加える必要がある場合もあり、スペースや印刷面への配慮から、頭注にまわした現代語訳もある。

一、本文には、会話の話者を（ ）で、主語その他、文脈の指示を「」によってそれぞれ色刷りで示した。

一、なお、頭注のスペースを利用して、段落のはじめに、物語の叙述内容を要約した小見出しを色刷りで掲げた。一つの巻の叙述を、どこで区切り、どう区分するかは、慎重な考慮を要する事柄であるが、今は、理解を助けるための便宜の処置としてこれを試みた。

一、それぞれの巻のはじめにその解説を載せて、理解の手引きとした。この物語全体にわたる解説は、第一巻巻末の解説を参照されたい。

一、『源氏物語』の解説は、歴史的に見て、中世以降の注釈の歴史にその多くを負っており、本書の頭注にも、時々、古い注釈書の名が引用されることがある。また注釈の歴史をどう見るかということは、校注者の注釈の態度ともかわる問題であるので、こうした点について、第一巻巻末解説中の「注釈について」を参照して校注者の意図を汲み取っていただければ幸いである。

一、巻末に、付録として、頭注に載せ得なかった催馬楽等の詞章、「琵琶引」、系図、図録を掲載した。図録は、頭注の図録参照の指示によって適宜参照されたい。



源氏物語 二



紅<sup>もみ</sup>

葉<sup>ちの</sup>

賀<sup>が</sup>

朱雀院<sup>すざくいん</sup>への行幸は十月の十日過ぎのことであつた。その前に試楽が宮中で行われ、源氏と頭<sup>かしら</sup>の中將は青海波<sup>せいがは</sup>を舞つて人々の感嘆の的となつたが、行幸当日の出来ばえは、朱雀院の華麗な紅葉の景観に映えて、また一段とすばらしかった。この行幸は、延喜十六年三月七日、宇多法皇五十の賀のための朱雀院行幸を念頭に置いて書かれたものと思われる。宇多上皇の名は、桐壺帝の一代前の帝として桐壺の巻に見えるが、上皇は朱雀院を御所とし、『古今集』では朱雀院と呼ばれている。

二条の院に迎え取つた若君は、いよいよ源氏になつき、相変らず難遊<sup>ひんぎょう</sup>びに熱中している。亡き北山の尼君の喪も年末には明けて、やがて新年を迎える。

葵の上は源氏より四歳ほど年上、左大臣の内親王腹のただ一人の姫君という気位の高さから、源氏の浮気沙汰を不快に思い、夫婦仲はしっくりしない。

二月の十日過ぎに、藤壺は、皇子を出産。帝のお喜びはこの上ないが、源氏に瓜<sup>うり</sup>二つの皇子のお顔を拝して、源氏と藤壺の悩みと恐れは深まるばかりである。

夏の頃、宮中に仕える好色な老女源典侍<sup>げんないしのすけ</sup>をめぐつて、頭の中將と源氏のコミックな輓<sup>さん</sup>当ての一幕があつた。中將は葵の上と同腹で、ことごとく源氏に對抗意識をもやしている。

七月に藤壺立后、源氏は参議に昇進。帝は、讓位の暁には藤壺腹の皇子を東宮にとのお心づもりである。

卷名「紅葉賀」は本文には見えないが、次の花宴<sup>はなのえん</sup>の巻で作者自らこの朱雀院の行幸を「御紅葉の賀」と呼んでいる。

一 朱雀院は、上皇の御所。三条の南、朱雀大路の西に八町を占める（図録二参照）。この院への桐壺の帝の行幸は、すでに、若紫の巻（一卷二二頁）、末摘花の巻（一卷二六三頁）に予告されている。大規模な特別の催しであることを強調する筆致から見て、単なる遊覧の行幸でなく、朱雀院におられる上皇（宇多上皇を思わせる）の算賀のため、朱雀院の行幸の試案にの行幸と見るべきであろう。

源氏、青海波を舞う

算賀は、長寿を祝う儀。四十の賀以降、十年ごとに祝うのが普通である。

二 後宮のお妃方。

三 当日行われる舞樂の予行演習。

四 清凉殿の東庭。（二巻図録五参照）

五 舞樂の曲名。唐樂。二人舞。鳥甲をかぶり、袍を着け、波の寄せ返すさまを袖の振りで表す優美ではな

やかな舞である。（図録六参照）

六 左大臣の子息、頭の中將。葵の上の兄。

七 桜の花のかたわらの、もてはやす人もない深山の木。目立たぬものの喩え。

八 舞いながら詩句を朗唱すること。この間、奏樂は止む。青海波の詠は、小野篁の作と伝える。「桂殿迎・初歳、桐楼媚・早年、剪・花梅樹下、蝶・燕画梁辺」これを四度に分けて字音のまま吟ずる。

九 阿弥陀如来の（迦陵頻伽のような）説法の妙音であらうかと。「迦陵頻伽」は、極楽にいる美声の鳥で、如来の説法の妙音にたとえられる（図録一二参照）。

## 紅葉賀

朱雀院の行幸は神無月の十日あまりなり。世の常ならず、おもしろ

ろかるべきたびのことなりければ、御方々、物見たまはぬことをく

ちをしがりたまふ。上も、藤壺の見たまはざらむを、飽かずおぼさ

るれば、試案を御前にてせさせたまふ。源氏の中將は、青海波をぞ

舞ひたまひける。片手には大殿の頭の中將、容貌、用意、人にはこ

とるを、立ち並びては、なほ花のかたはらの深山木なり。入りか

たの日かげ、さやかにさしたるに、樂の声まさり、もののおもしろ

きほどに、同じ舞の足踏み、おももち、世に見えぬさまなり。詠な

どしたまへるは、これや、仏の御迦陵頻伽の声ならむと聞てゆ。お

もしろくあはれなるに、帝、涙をのごひたまひ、上達部、親王たち

も、みな泣きたまひぬ。詠果てて、袖うちなほしたまへるに、待ち

「光る」は、美しさの最高の形容。「光君」(一巻桐壺三六頁、四二頁)、「光源氏」(一巻帚木四五頁、若紫一九二頁)という渾名は前に見えている。

二 東宮の母女御。弘徽殿の女御。

三 神などが空から愛でて神隠しにでもしそうな美しさだこと。醍醐天皇の大井川行幸の時、雅明親王が七歳で見事な舞を舞い、万人感涙を催したが、「あまり御容貌の光るやうにしたまひしかば、山の神愛でて取りたてまつりたまひてしぞかし」(『大鏡』昔物語)という話がある。『河海抄』に引く。

四 だいそれた気持がなかったならば。藤壺に対する源氏の思慕の情をさす。

五 そのまま(御殿の藤壺に下がらずに)清涼殿の夜の御殿で帝の御寝に侍した。

六 青海波に万事庄倒されてしまいましたね。

七 良家の子弟は(やはり)格別です。総合的な、貴族らしい教養、品格を重んじて、専門家の技芸を軽く見るのは当時の貴族一般の考え方である。

八 当日の(朱雀院での)紅葉の木蔭での舞はおもしろくなかうかと思うけれども。

九 (源氏たちに)特に念入りにと命じたのです。「用意す」は、意を用いる。「させ」は、使役の助動詞。

構えて再開された宴樂のはなやかさに  
とりたる樂のにぎははしきに、顔の色あひまさりて、常よりも光る

と見えたまふ。春宮の女御、かくめでたきにつけても、ただならず

おほして、「神など、空にめでつべき容貌かな。うたてゆゆし」と

のたまふを、若き女房などは、心憂しと耳とどめけり。藤壺は、お

ほけなき心のなからましかば、ましてめでたく見えましとおぼすに、

夢のこちなむしたまひける。

宮は、やがて御宿直なりけり。「今日の試樂は、青海波に事みな

尽きぬな。いかが見たまひつる」と聞こえたまへば、あいなく、御

いらへ聞こえにくくて、「異にはべりつ」とばかり聞こえたまふ。

「片手もけしうはあらずこそ見えつれ。舞のさま手づかひなむ、家

の子は異なる。この世に名を得たる舞の男どもも、げにいとかしこ

けれど、ここしうなまめいたる筋を、えなむ見せぬ。こころみの日

かく尽くしつれば、紅葉の蔭やさうざうしくと思へど、見せたてま

ようというつもりで、用意させつる」など聞こえたまふ。

翌朝、源氏、藤壺と和歌を贈答

一〇(昨日の舞は) どうぞご覧になったことでしようか。  
以下、藤壺にあてての手紙。

一一恋の悩みのため立派に舞うこともかなわぬこの私が、思いのたけをこめて袖を振って舞った気持をお分りいただけたでしょうか。「立ち舞ふ」は、世間で立派に振舞う意を掛ける。「袖うち振りし」は、袖を振る青海波の舞の手に、愛情を示す所作として袖を振る意を掛ける。

一二恐れ多いことです。手紙の結語。

一三(昨日の) 目を奪うほどだった源氏のご様子、美貌に、このまゝお見過しになれなかったものであろうか。以上、挿入句。

一四唐の人が袖を振って舞った舞の手振りは遠い昔のことですが、昨日のあなたの舞いぶりにはしみじみと感じ入りました。青海波はもと中国から伝えられたものであるが、仁明天皇の勅命によって、原作の平調を盤渉調に改め、舞を良峯安世が作り、案は和邇部大田麿等が作ったと伝えられる。

一五(その程度の) 一通りには(理解いたしました)。

一六いかにもお后にふさわしい格調のあるお歌を、もう今からお詠みになる、と、ひとり笑みさされて。藤壺が后に立つのは翌年のことである(四四頁)。

一七常に手離さず読誦する經典。

朱雀院行幸の盛儀

翌朝

つとめて、中將の君、

いかに御覧じけむ。世に知らぬ乱りごちながらこそ。  
(源氏) 一〇 何ともいえないくらい気持のまま舞ったのです。

もの思ふに立ち舞ふべくもあらぬ身の

袖うち振りし心知りきや

あなかしこ。

とあるのへのお返事  
とある御返り、目もあやなりし御さま、容貌に、見たまひ忍ばれず

やありけむ、

唐人の袖振ることは遠けれど  
(藤壺) 一四 からひと

立居につけてあはれとは見き  
たちる

おほかたには。

とあるを、限りなうめづらしう、かやうのかたさへたどたどしから  
(源氏は) めったにないお返事にうれしく、こうした舞奏の来歴にまでおくわしくいらして

ず、ひとのみかどまで思ほしやれる御后言葉の、かねても、と、ほ  
異国のことにまで思いをめぐらされた

ほゑままれて、持経のやうにひき広げて見ゐたまへり。  
てきやう

行幸には、親王たちなど、世に残る人なくつかうまつりたまへり。  
ぎやうがう  
みて  
お供なさった

一 楽人の乗る龍頭錦首の船。唐楽を奏する船の船首に龍、高麗楽の船の船首に錦（想像上の水鳥、よく風波に堪えて飛ぶという）の像をつける。（図録六参照）  
 二 唐楽（中国、印度、西域から伝来した舞曲。左の楽ともいう）と高麗楽（朝鮮、中国東北部から伝来した舞曲。右の楽）。

三 打楽器。唐楽には、羯鼓、太鼓、鉦鼓、高麗楽には、三の鼓、太鼓、鉦鼓を用いる。（図録八参照）

四 先日（試奏の日）の。

五 祈禱のために寺に誦経を依頼すること。

六 青海波の時、舞人とともに庭上に出て奏楽する楽人。庭上に輪を作りその中から舞人が舞い出るのでこの名がある。楽器は、琵琶、笙、篳篥、横笛各一人、ほかは反尾で拍子を打ち、楽屋の楽人と交互に演奏する。人数は四十人。ただしこのうち二人（後世は四人）は輪台という序の舞を舞い、二人は青海波（破の舞）を舞う。源氏たちは破の舞を舞ったのである。

（図録六参照）

七 殿上の間に上ること

源氏、青海波に秘術を尽す

を許されぬ者。

へ参議の中国風の呼び方。太政官で大納言、中納言に次ぐ地位。次の「左衛門の督、右衛門の督」（左右衛門府の長官）は、その兼官。それぞれが左の楽（唐楽）右の楽（高麗楽）の総監督に任じたというのは、異例の大規模な催しであることを物語る。

九 青海波の舞人は鳥甲をかぶるが、それに紅葉の枝

春宮もおはします。例の、楽の船ども漕ぎめぐりて、唐土高麗と尽くしたる舞ども、種多かり。楽の声、鼓の音、世をひびかす。一日の源氏の御夕影、ゆゆしうおほされて、御誦経など所々にせさせたまふを、聞く人もことわりとあはれがりきこゆるに、春宮の女御は、あながちなりと憎みきこえたまふ。垣代など、殿上人、地下も、心異なりと世人に思はれたる有職の限りとのとへさせたまへり。宰相二人、左衛門の督、右衛門の督、左右の楽のこと行ふ。舞の師どもなど、世になべてならぬを取りつつ、おのおの籠りゐてなむ習ひける。

木高き紅葉のかげに、四十人の垣代、言ひ知らず吹き立てたるもの音どもにあひたる松風、まことの深山おろしと聞こえて吹きまよひ、色々に散り交ふ木の葉のなかより、青海波のかかやき出でたるさま、いと恐ろしきまで見ゆ。かざしの紅葉いたう散り過ぎて、

顔のにほひにけおされたるこちすれば、御前なる菊を折りて、左